

Subjective impression and event perception of auditory imagery associated with Japanese onomatopoeic representation

藤沢, 望

<https://doi.org/10.15017/459571>

出版情報 : Kyushu University, 2006, 博士 (芸術工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :

第9章 総括

本研究では、文字表現された擬音語からイメージされる音について、一連の主観評価実験と自由記述実験および衝突音を用いた聴取実験を行い、イメージされる音の印象、音色、音の種類や音源・事象に関する情報と擬音語表現の関係を考察した。本研究で得られた知見は、実際の音と擬音語の関係を調べた先行研究の結果とも対応しており、擬音語の音韻的特徴が音の印象や音源・事象を推定する手がかりとなっていることが明らかになった。

最後に、この研究を通じて得られた擬音語に対する著者の考えを述べる。

擬音語は、実際の音に比べて非常に曖昧な表現である。音の高さを細かく表現することはできないし、「雨の音」と「ホワイトノイズ」が同じ“ザー”で表現されることもある。しかし、我々は、このデフォルメされた表現を用いてうまく音を模倣し、他者に音の情報を伝達している。日常では、擬音語が単独で使われることは少なく、会話の文脈や視覚的な情報と共に利用されることが多いと思われるが、本研究のような制限された状況下でも、擬音語は実に多様な情報を与えてくれる。その曖昧な表現の中にも、音の特徴や音源・事象に関わる情報が反映されているのである。また、我々は、受け手の側になった場合でも擬音語に内包された情報を利用して、様々な音の違い、音源の違いをとらえることができる。このような曖昧な情報を効果的に利用する能力は、人間の優れた特徴の一つであろう。先行研究では、計算機によって擬音語を扱うシステムの検討がいくつか行われているが、擬音語表現の多様性の問題を解決するために、様々な工夫がなされている。この曖昧さが、知覚や認知の過程に基づくものか、言語の扱いにおいて生じるものかはわからないが、擬音語を研究するということは、曖昧な情報を効果的に利用する我々の能力を明らかにすることでもあるのではないだろうか。

もちろん、ここで述べたことが、すべての状況・すべての人間において当てはまるとは言えない。例えば、日本語以外の言語では、オノマトペによる表現が日本語の場合とは異なることが確認されている。むしろ、このような違いを研究していくことによって、人間と音の関わり、言語の果たす役割などについて明らかにすることができるだろう。また、擬音語は、音に対する感性や認知のしくみを反映するものだと考えられる。ここで得られた知見が、擬音語に関する研究のみならず、音とそれに対する知覚や認知のしくみ、さらには音源となる外界の事象との関わりを解明していく上で貢献しうることを期待している。